

毛勝山遭難

事務局での経緯



5月28日(日)

今年にはシャクナゲの当たり年らしい。これまでも砂御前、鳴谷の尾根をシャクナゲの木の多い所だと通ってきたが、それが一面に咲き、シャクナゲロードになっていた。一方湿地帯の方はミズバショウが、これも斜面のはるか上部まで、目覚めたばかりの白い帽子の小人達といった風情で広がっている。むろん、頂上ではダイナミックな白山のパノラマが迎えてくれた。本当は荒島岳へくろゆりクラブのサポートに出ていかねばならないのに、あえて分県ガイドの写真がすんでいないと、鳴谷山へ向かった舟田家には、幸せ過ぎる満点山行だった。

そんな興奮のさめやらぬ夜9時半、電話がなる。3期OBの高島さんだった。彼には35周年記念誌の時、大量の資料を送っていただいております。

「ああ、あの時はどうもお世話になりましたー」

「実は、昨日毛勝へ登山した知人が戻らず、今日捜索隊が出ましたが、見つかっておりません。現役の方に頼んでもらえませんか。相応のお礼は出したいと言っております。」

とりあえず、連絡先である遭難者宅寺崎さんの電話番号をメモする。どう判断してよいのかわからない。もちろん、さっきまでの興奮はふっとんでしまい、ただ心臓が高鳴る。

ともあれ、突然の電話ばかりで申し訳ないが、大島会長に電話する。びっくりされた後、「現役に連絡してみて。お世話をかけますけど」との指示。

でも…。現役主将の佐川さんなら、1週間前、新トレの倉谷で会い、少しOB風を吹かせてきたので、面識はある。でも「OBの知人と我々と、どんな関係があるんですか？」とか「それに従わなければならないんですか？」なんて、反問されたら、どうしよう。実際、何の権限だってない。でも時間がない。ままよ！と電話をとる。



毛勝山で男性不明  
高岡の  
会社役員

単独登山したまま戻らず

二十八日午前一時ころ、寺崎健治さん(50)の家族が高岡市中川上町、会社役員ら、寺崎さんが魚津市と富山県宇奈月町にまたがる毛勝山(標高二四一四)に時間になっても戻らない

と魚津署に届け出があった。同署と奥嶽山岳警備隊の隊員ら十二人が入山して捜索にあたるとともに、午前六時から奥嶽ヘリコプター「つるぎ」も出勤、空からの捜索を続けたが、毛勝山一帯はガスが濃く、寺崎さんは見つかっていない。大学時代、山岳クラブに

所属していた寺崎さんは山の経験が豊富で、奥内の山のほとんどを走破しているが、毛勝山登山は初めてだった。

しどろもどろに、3期のOBから現役に頼んでくれるよう連絡が入っていること、そして、現役とはあまり関係がないけれど、遭難対策を現場で見に来るのもいい体験になるのではないかと付け加える。

「ハイ、あたってみます。」で電話が切れる。第1難関突破。だけど、今度は、本当にでかけるとなったらどうしよう。また違う不安が募る。〈責任〉におしつぶされそうになる。

頃合をみて、佐川さんにかける。ずっと話中だ。かわいそうに、あちこち当たってくれているのだろう…連絡費を前もって渡しておくべきだった。剣岳の事故の翌年に入部している彼らの方が、〈遭難〉にはびっくりしてしまうかもしれないのに。

ようやくつながる。時、10時半過ぎ。

「明日動こうか迷っているのが二人。その次の日からなら、何人かは動けます。」

寺崎さん方へ連絡をいれる。高島さんは帰宅された後で、遭難者の甥という方が電話に出られる。

「今の所、県警の方と捜索隊が10人程。明日が正念場と思われるので人手が欲しい。明日は5時半に魚津署へ集合して欲しい。それに間に合わないようであれば、以後は携帯電話か、この自宅へ連絡をとって問い合わせさせて欲しい」あちらのせっぱつまった気持ちが伝わる一方で、これだけの情報で、どうして現役を走らせられるものか?!

困惑しながら、高島さん宅へかける。まだ帰宅しておられず、奥さんの返事。

「ご迷惑をおかけしております。先程現役の友野さんからもお電話をいただきました。まだ戻っておりませんが、明日早朝こちらからかけると申しておりました。連絡先は佐川さんと聞いております。」

では、明日になってからということか…。

以上を、大島さん、佐川さんに知らせる。



5月29日(月)

午前6時半、高島さんより電話。

「今日の捜索により、捜索会議が3時から5時の間に行われ、以後の体制が決まります。その結果を5時までには入れるようにします。そちらでは何人動けそうですか。」

昨日の佐川主将の数字を伝える。

「OBの方ではどうですか?」

「あたっていませんが、23期の小久保さんなら高岡だし、チロル山の会に入っているので、動ける方をあたってもらえるかもしれません」この情報も、30周年山行で個人的に彼と話をしたから知っていること。OBの誰がどれだけ山と関わっているものか…。何ら情報の整っているOB会ではない。電話をいれても、狼狽と困惑に染まるだけであろう…。

ともあれ、何人か動くとなれば、動く人達の立場はどうなるのか?気楽な学生とはいえ、後ろには親がいる。トラブルに巻き込まれることを喜ぶはずがない。やはりここは前田顧問に連絡と指示を仰がねば…。

午前9時半、前田顧問の研究室へ電話。昨日からの経緯、学生が動くにあたり、どうフォローしたらよいか?大学へはどう対応すればよいかをお尋ねする。

「それは連絡をいれておいた方がいいでしょう。遭難者の家族から、OBを通して出勤を頼んだのでよろしくとでも、学生部学生課課長補佐の寺田さんに、前田から聞いたと連絡を入れておいてもらうといいですよ。」

他に動けるとしたら、石川君らの代が一番動きやすいんだが…。丁度日曜日まで現役達は斥候で、雷沢に入っていたんで、もっと早く分かっていたら、そこからすぐ捜索隊に加わったんですけどねえ。」

メガトン級の責任に押しつぶされそうな私にはうれしくなるようなアドバイスであった。

続いて、院生OBの石川さんに、物理学科の物性物理研究室の電話で連絡。そこで、明日から動くといっていたのは彼らであったことが判明。

「昨日の佐川からの電話を、僕らの期にはみんな回して、動く用意をしています。お茶くみでも何でも、現場へ行って、できる範囲のことは動きます。」

さすが遭難を体験した期は対応が違うなと感心。連絡が入り次第、石川さんに直接連絡を入れることにするから、と切る。

以上をまた、前田顧問に連絡。

「やっぱりあの代はしっかりしてますよ。あと思い出したんだが、早川なら毛勝は行きますよ。去年、追悼山行の時、雷鳥沢でたまたま会って、彼も追悼に加わってくれたんだが、毛勝へ行くと言うてました。富山化学の山岳部に入ってるいうてたし。彼なら動けるんでないですか。」

そうか！OB会に連絡が来ん来んというより、顧問の方がよくご存じなのだ。頼まれ顧問ではなく、山現役の顧問であることに感謝。

10時半、高島さんは留守だった。寺崎さんに直接かける。対策会議の結果を待って待機していること。ワングルの顧問にも連絡をいれてあること。もし出勤が必要であれば、学生課へその旨の連絡を入れて欲しいこと。

寺崎さん方では年配の方が電話番号を引き受けておいでた。

「実は、捜索隊の隊長に、金大の山岳部（！）にも応援を頼んでいると申し上げたところ、毛勝は雪山の経験があるだけでは間に合わない。毛勝へ入ったことのある者でないと動いてもらう訳にはいかないとおっしゃっておいりました。私共も、もうあきらめてはおりますが、会議の結果を聞いて改めてご連絡をいれさせていただきますので」

ここで、高島さんからの電話がはいる。顧問に連絡をとったこと。学生が動くにあたっては、寺崎さんから学生課へ要請を入れてもらうよう

頼んだこと。待機しているのは院生OB達であること。

「さっきの電話では、毛勝の経験者でないと…ということでしたが…」

「雪山の経験は有るんでしょう？」

「ええ、ありますが…。ああ、あと19期の早川大善さんが富山化学の山岳部において、毛勝の経験もあるそうです。」

「富山化学ならわかるから、連絡してみます」  
…皆がパニックなんだから、話が食い違ってくるのも仕方ないか…。さて、3時まで、何か抜けていることはないだろうか？



午後1時。こういうことでは、役員中誰よりベテランであろうと、楯さんにかける。昨日からの経緯と、

「今のところ連絡の便をとるという立場で動いてはいるけれど、他に何か思いつくことはありますか？」

「早川のことくらいで、ちょっと思いつかないんですが。捜索が長引くようであれば、自分も都合をつけて加わるようにしてみます。今日、明日というわけには…。それに、今の時期の毛勝となると、正直いって怖いですね」  
対策会議の結果を聞いてまた相談することにして切る。

午後2時。高島さんから電話。

「対策会議はまだだが、今のところ、地元山岳会が15名ほど。他にベテラン勢が30人は集まっているそうです。どうやら動いていたがわずにすみそうですが、会議の結果が出てから改めて…」

とのこと。

午後3時半、寺崎さんから電話。

「只今魚津署におりますが、隊長のおっしゃるには、今一番危険な箇所搜索にあたっている。二重遭難の恐れがあるので、入らないでほしい。2-3日して、それ以外の広範囲に搜索を広げる時にはお願いするようにとのことでした。私共、隊長のおっしゃるとおりで動いておりますので、そうなりました時には、改めてよろしくということをお願い致します。」

—それは、もう<遺体>の搜索を意味することでもあり、淡々とした口調の中に、無念さがにじみ出ていた。

以上を、石川さん、前田顧問、大島会長、榎さんに連絡。

午後5時近く、高島さんから

「もう、待機は解いたんですね？お世話になりました。改めて、皆さんにお礼に行きます」とのこと。

長い、重苦しい一日だった。

5月30日(火)

こちらの新聞には何も載っていない。高島さんの所へかけるのも、まして、寺崎さんにかけるのもお気の毒で、魚津署へ

「待機中の者だが」

とかけてみる。今日も見つからず、明日も搜索隊が出るとのこと。

5月31日(水)

午後5時、高島さんが寄っていかれた。悪い結果になりそうな経緯と、溜まった仕事にご憔悴の様子ながら、

「待機していただいた方々によるしく。」

と金封をことづけていかれる。

快い返事で応えてくれた彼らへの、せめてもの気持ちとばかり、すぐ届けに行く。

「動いていないのに」と彼等は躊躇していたが、現役主将の佐川さんには部への寄付として、

院生OBの石川さんには、剣岳追悼への寄付として、受け取ってもらった。

この日の昼、役員でグループ叢のメンバーでもある久富さんは、榎さんから

「今度の週末は、毛勝へ行くことになるかもしれない」

と聞いていたそう。

また、前日出したOB会役員通信により、今日は、OB会役員全員にこの遭難は伝わっている。

6月2日(金)

天候と新聞を気にしつつ日が過ぎる。

午後4時半、高島夫人から電話。

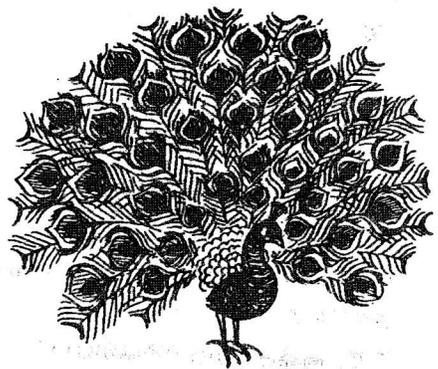
「寺崎さんが見つかりました！生きておいでました！」

午前中に見つかったのだそう。でも高島さんが東京出張中で、こちらの連絡先がわからず、さっきやっと連絡がとれて、お知らせできることになったとのこと。

こんな連絡はうれしい。電話をとった誰もが驚き、喜んでくれた。

それから夕刊を広げ(北国新聞にはわずかの記事であったが)そして考えてみれば、ひたすら電話が行き交っただけのことでもあったが、思わぬつながりのあった遭難者無事救出の記事を、何度も読み返してみたのだった。

(富山新聞は、15期松林 知一さんに入手していただきました。)



## 毛勝山は豊稔佳の記録

高岡市 寺崎 健治

### \*はじめに

私は平成7年5月27日(土)に日帰りの予定で毛勝山(2,414m)に登るつもりで登路を勘違いし、間違っで大明神山に登ってしまったため帰路を滝に阻まれ、止むなくヒバークを強いられ、入山7日目に県警山岳警備隊により救助されました。

救助される際、隊員より説明を受けるまで、私の登ったのは毛勝で、今いる場所は毛勝谷の支流の一つだと思っていたお粗末さで、いささか恥ずかしく思っております。

この度、富山県人社の高島社長より、遭難救助出動のためにスタンバイしてくれていた金沢大ワンダーフォーゲル部の会報にこの遭難の経緯を掲載したいので、是非記録を書いてくれと依頼され、今回の遭難には内心忸怩たる思いの私としてはお断りしたかったのだが、遭難当事者として反面教師になれば、今後の遭難防止の一助になるのではないかと、恥をしのんで執筆をお引き受けした次第である。

山が好きな若い人達が、この記録により、少しでも安全登山を心掛けていただけるようになれば、私も嬉しく思います。

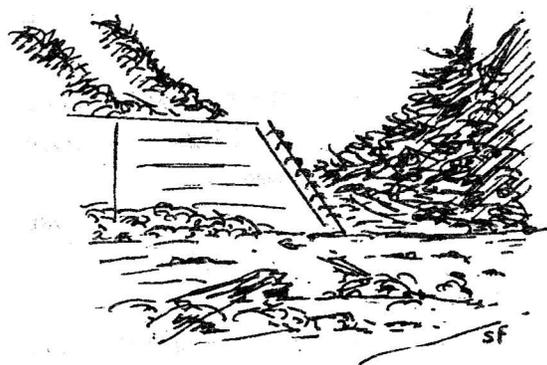
### \*毛勝山概要

毛勝山(2,414m)は北ア剣岳の北に位置し、北より南に、毛勝山、釜谷山(2,415m)、猫又山(2,378m)と並び、この三山を総称して毛勝三山と呼んでいる。

この山には一般的登山路は無く、雪渓を利用して登頂になる。毛勝の雪渓は標高差1,200mで、日本三大雪渓の一つとして有名な白馬大雪渓でも600mだから、この長大きがわかる。

この山は日帰りで高山気分が堪能できるので、県内外の登山者に人気が高い。

故深田久弥氏も、この山を日本百名山の中に入れたかったらしい。



一般登山路である阿部木谷-ポーサマ谷往復の場合、登り4時間半、下り3時間である。雪が落ち着き、アブローチの林道に車の乗り入れが出来る5月中旬より、雪渓上にクレバスが発生する前の6月中旬までが登山最適期である。

戦後の遭難事故は20件で、9人の死亡者を出しているという。

### \*5月27日(土) 晴れ 第1日目

3:20起床、3:50自宅(高岡市)発。途中のコンビニにて、オニギリ、クリームパンを買う。小杉ICより魚津IC(4:35)、途中道を尋ねながら走るの時間がかかり、片貝山荘上部の、雪で塞がれた林道地点着5:35。そこには多摩ナンバーのワゴン車に、5-6人の人達が出発の準備をしており、お先に出発する。(5:50発)

体調、天気共に良好で、ボカスカ歩く。最後の砂防堰堤に取り付けられたクラップを降りる。途中アイゼン着用、休憩無しでドンドン登る。きつい登りだ。シュカブラの窪みを利用して登る。ガイドブックの説明にしては急な斜面だと思いつながら登る。

稜線着10:40。頂上11:20着。稜線のツメが急であったことと、ピークが右側に見えたことから、登ったのはポーサマ谷ではなかったようだ。頂上はただっ広い雪原で、15cm角の三角点があった。あとから来る登山者を待ちながらスケッチでしようと思ったが、風が強く、寒い

ので、早々に下山することにする。

地面が顎を出した三角点より雪面まで1.5m程の高さがあったので、ピッケルで30cm角の階段をつけて登る。

案内書によれば、ポーサマ谷鞍部より頂上まで約15分とあったので、下り始めて約5分程の所にあった右側の大斜面を下る。

踏み跡や、グリセードの跡のようなものが見える。グリるにはいささか急すぎるので、アイゼンを外さずに快適にドンドン下る。

途中雪渓の崩壊箇所があり、右岸の山菜の多い灌木の中を歩く。しばらくして、やはり雪渓が崩れており、右岸の滑りやすい草付きの急斜面をへつる。下は滝で怖い。滝を巻いた所で雪渓に下るのだが、そこに巾1間程のシュルンドがあり、思い切って跳び降りる。

雪渓上で小林止して考えた。ここまでのコースがこんなに悪いのだから、この下はどんな悪場があるかも知れない。未知の谷は下るなどというのが山の鉄則だから、これ以上この谷を下るのは危ない……と、登り返すことにする。



2時より戻り始め、途中雪渓を2本間違え、また戻ったりしながら登り続けた。

やっとの思いで稜線上にたどり着いたが、ガスってきたため、場所不明。6時半であったし、天気もあやしげで、なにしろ13時間近くも歩いて憔悴し切っていたので、稜線上の笹ヤブの中でピバークすることにする。比較的平らで凹凸のない所にツェルトを張り、2m角のビニールシートをフライとして張る。ツェルトの近くの雪面に生えていた立木に、赤いバンダナを結び、レスキューのための目印にする。

空腹だったので食事を摂ることにする。入山時に持参した食糧は、オニギリ4個、クリームパン1個、カンパン1袋、コンビーフ1缶、チョコレート、バター飴20個、ウイスキー150ccで、既に、オニギリ2個とパンは消化済み。

夕食はオニギリ1個のみ。寒いので、着替えの長袖シャツ、モモヒキ、パンツ、靴下などを総て着用する。セーターやゴアテックスのコートも着込む。高度2,000mとして、温度低下12度、下界の最低気温が15度として、氷点下にはならないだろうと計算する。念のためにゴンスケ（尻皮、尻敷き）を背中に入れ、タオルを首に巻き、毛糸の帽子を被り、軍手とスキー手袋をはめる。ザックの物を総て出し、足を入れる。

9時就寝。明日の中田君と河原君との荒島岳山行が気になる。美恵子、心配かけてゴメン、明日は帰るから。疲れて暫くまどろむが、寒さですぐ起きる。ウイスキーを少し飲んで体を暖めて2時間程眠れた。寒い！まだ1時。朝が特遠しい。寒いのでローソクをつける。ローソクも手をかざすと暖かいが、ツェルト内はほとんど暖かくなれないようだ。下界の暖かい布団が恋しい。丸く縮こまって、朝までガタガタ震えていた。

#### \* 5月28日（日）晴れ 第2日目

5時起床。朝食はオニギリ1個。ツェルト撤収後6時出発。猛烈な藪漕ぎ。7時頃か雪の稜線上で、剣岳方面から頭上にヘリが飛ぶ。赤いバンダナをさかんに振るが、気付いてもらえなかった。

主峰まで行かないうちに、左側に踏跡とグリセードの跡らしきものがあり、ルートと判断して下り始める。

ところがこのルートが曲者で、途中逆層の岩場などがあり、そこをビクビクもので通過したが、その先にも悪場が数箇所あり、最後の本雪渓に下る所はおおよそ50-60mの断崖で切れ落ちている。とても下れそうもないので、引き返すことにする。雪が緩んできたのか大がかりな落

石に会い、肝を冷やす。先程の逆層の岩場では足をこらし、5-6m滑落した。滑落の瞬間に体を反転させたので、下の半畳程の岩棚に尻と尾てい骨をしたたかぶつけてしまった。

岩棚の下は急な切れ込みであり、ホッとすると痛さをこらえながら、又、この沢を登りつめ、振り出しから基本的に考え直す必要がある…と、頂上までガンバル。

頂上着2時。今日は日曜日で、他の登山者が



いるかと期待したが、誰もいないのでガッカリする。

暫く待ってみたが、誰も来ないので、仕方なく一人で下ることにする。昨日下った大斜面を避けて二つ目の大斜面(多分、ポーサマ谷…と思ひ込んで)を下ることにする。踏跡らしきものもあり、間違いないだろうとドンドン下る。

すると、昨日の雪渓の崩壊場所に出て、右岸の山菜の多い道や、その下の高巻きの道もそっくりあった。昨日のルートは間違っていなかったのだ!途中、沢を渡渉したり、両岸が急でへつりが出来ない薄くなったスノーブリッジ上をコウゴワ通過したりしながら、今日は家に帰れると期待しながら歩いていると、狭いV字谷に出て、雪が全然ない。その先に滝があって、滝の手前には水が涸々とたたえられている。

兩岸を見ると、草付きのガレ場である。私の技量では通過する自信が全然なし。又、仮に岩場をへつって滝の向こう側に行くにしても、滝の落差や岩場の状況もわからない状態では挑戦できない。もう本当にガッカリして、途方にくれる。

仕方がないので戻ることにする。しかしこの辺は谷も狭く、傾斜もきついので落石の危険が多く、テン張ることは危ない。500m程登り、30m程の巾の雪渓の左岸にツェルトを設営することにする。ツェルトを張った所は雪面上に落石もなく、上の斜面は草と灌木が生えていて岩石もほとんど見えないので、落石の心配はないだろう。ただ、豪雨が降った時は土砂崩れの心配があるが…。

雪渓の勾配は結構あり、ピッケルのブレードでならすのに苦労する。整地したところで、付近の雪渓上の流木や倒木、縦の葉をツェルトの下に敷きつめ、ビニールシートをフライにする。

夕食はウスキー少々(これで終わり)と、コンビーフの缶詰のみ。今日3時頃、ルート途中の雪渓の崩壊箇所で山菜の生えた灌木帯を歩いている時、ヘリが下流の方向へ飛んで行き、赤いバンダナを振ったが気付いてもらえなかった。今日中に帰れると思っていたのにガッカリだ。就寝7時半。お尻が痛むのと、寒さで、やはり眠れない。

#### \*5月29日(月) 晴れ 第3日目

起床4時。今日も快晴。日帰り山行となれば今日は遭難2日目。昨日のヘリは何のために飛行していたのだろうか?私のためか?又は他に遭難者があったのか?もし私の為とすれば、遭難2日目で打ち切るわけがない。

よし!今日はヘリに発見してもらおうぞとハリキル。高い枯木を見つけてきて、それに赤いバンダナを結び付け、救難旗にする。2m四方のビニールシートを雪渓の上に広げ、上空からでも目立つようにし、紫色の目立つザックも外へ出した。

午前中に下に水が流れている雪渓上のテント場では危険だと思い、左岸の草の斜面のテント適地を探していたところ、ウドを見つけた。

シメタと、4-5本ピッケルのブレードで切って帰った。生でかじったが旨いものではない。

しかし、空腹は満たせた。残りの食糧—カンパン15個、鮎16個。

今日、夕方まで1度もヘリを見かけず。やはり昨日のヘリは私の搜索のためではなかったのか？それとも未だ遭難届を出していないのか？又は搜索、救助の費用が高くつくので断ったか？まさか…。様々な疑問が頭をよぎる。美恵子に何かあったのか？家族に何かあったのか？それで届が遅れているのか？下界で、すぐに帰って来るだろうと楽観視して届が未だだとすれば、いさか心配なことになる。食糧も乏しくなってきたし、このテントサイトも決して最良とはいえない。

風が強いし、雪の溶け方が早いため、毎日のように下地をならし、ポールやペグの打ち直しをしないとイケない。右岸の水場の下は雪渓が大きな穴を開けており、草付の急なガレ場は水汲みに危険このうえもない。又、大雨の時のツェルト上部の崖崩れも心配だ。

家ではあまり心配していないのかな？美恵子はどうしているだろう。子供達は？中田君、河原君は？兄貴は？

救助隊が来ないととなると困った。あの滝を通過する自信はないし。一般登山者が入山するのは土曜、日曜で、しかもこれだけ雪渓の崩壊が進めば、入山者は皆無かもしれない。

こうなれば自力脱出、強行突破しかないか。しかし危険が多過ぎる。滝を下らないで、尾根を下るか—この尾根の下部は岩か、不安定な草付の危斜面で、登るのは容易ではない。では、もう一度ピークまで登り直すか？しかし、ここまで来る間にも沢山の悪場があった所を、体



力、気力、食糧のない今、無事通過する自信がない。途中バテて身動きが取れなくなった時、安全なビバーク地が見つかるか？

総て悪く考え、前へ進まない。ウツウツと一日を過ごす。夕方、腹の具合が悪い。下痢がひどい。生のウドのせいか？夕食は抜き。未だ暖かい時に寝ておこう。就寝6時半。

\* 5月30日 (火) 晴れ 第4日目

テント場も設営後2日たち床が痛んできたので、少し下の箇所に移すことにする。ピッケルで斜面を整地するのだが、空腹で腕に力が入らず、少し動いては2-3分休み、ユルユルと仕事をし、2時間近くかかって完成する。

今度は床に倒木を敷きつめ、その上に縦の葉を並べるように敷いたので、良い床が出来た。

生のウドで懲りたので、今度は煮て食べることにする。ウドを斜めに薄くスライスし、アルミカップに入れ、水を最小限入れ、カップの底についた水気を拭き取り、ガスコンロをアルミホイルで被い、炎を最小限に調節して沸騰後はすぐ火を消して余熱だけで煮た。

ガスボンベは1本しか持っていなかったので極力節約を図ることにし、暖房には一切使わないことにした。

一切の調味料の入っていないウドは不味く、もどしそうになるのを無理矢理食べた。私はこれを「ウドの真水炊き」と名付けた。これを食べると、下界でどんな不味いものでも喰えるのではないだろうか。

今日も終日、昨日と同じパターンで過ごす。ヘリの機影も全然見えず。おかしい。搜索願いを出していないのだろうか？美恵子は、子供達は、中田君、河原君は、兄貴は、会社の方は、誰も疑問に思わないのだろうか？下界の状況が全然わからない。携帯ラジオを持ってこなかったのが悔やまれる。ただ、ここは定期航路とみえて、ジェット機がよく飛ぶ。その度に空を見上げて手を振る。視力2.5の乗客がいらないだろうか？

こうなったら滝の強行突破を図ろうかとも思ってみる。でも未だ死にたくはない。死体で早く帰るよりも(死体も発見されないかもしれない)、遅くとも生きて帰る方が良いだろう。いずれにしても皆様に迷惑のかかる話…なのだから…と居直る。

神大山岳部の西田先輩や、五味、金子、前田、中野達や現役の誰かに連絡すれば、すぐ遭難対策本部を設置して行動に移してくれると思うが、美恵子も気が動転しているとすれば、そこまで気がつかないだろう。

いつも出発前に家に置いてくる山行計画書を、数日前からの忙しさに紛れて書かなかったのが悔やまれる。どうしてよいのかわからない気持ちで就寝。

夜中にドシャブリの雨。そのうちに雷が鳴る。稲光より雷鳴まで1秒から2秒。350mから700mか。近い!怖い!ツェルトの外にビッケルやアイゼンがあるので心配だ。かといって、それを遠くに置きに行く勇気もない。ただただ小さくなって神に祈るのみ。雷は2時間近く続いただろうか。その間、生きた心地がしない。もしここで死んだら、美恵子ゴメンと言うのみ。最後は覚悟を決めて、町人が武士に向かって、「エエイ斬れるものなら斬ってみな!」という心境になっていた。そのうち、雷雨も止み、朝。生きていた!神に感謝する。

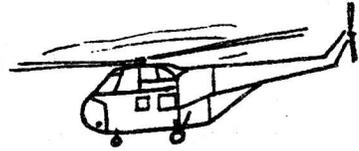
#### \* 5月31日(水) 晴れ 第5日目

4時起床。いつもながらにツェルトの内面が結露して、その水滴が落ちて衣類が濡れている。これは何か対策を練る必要がありそうだ。

今日も晴天。今日は良い事があった。まず、右岸の水場近くでフキを見つけたこと。今まで危険な水場で、夢中で水を汲んでいたのが気が付かなかった。フキはウドと同じ要領で煮て食べたが、ウドより美味?であった。それ以後ウドは止めた。

今日も午前中は全然機影見えず。神に祈りたい気持ちだ。どうしよう。

午後になってヘリの飛んでいるのが見えた。夢中で手を振る。気がつかなかったようだ。しかしそのうちに、だんだん近くを飛ぶようになった。いつも、いつも、もう大きく手を振って大声を上げて呼ぶ。近くを飛んでも生憎ガスがかかっている、こちらから機影がかすかに見える程度だったりして、気がついていない風だ。



そのうちにヘリや飛行機がよく飛来するようになった。もう夢中で手を振る。最後はやはり気がついたようだ。よかった。助かった。これで帰れる。夕方なのに救助できるのだろうか。心配だ。

4時頃になると総ての機影が消えた。外で7時頃まで待ってみるが、何も来ないのでツェルトに入る。空腹を覚えたのでフキを食べる。フキはウドよりもまあまあ喰える。しかし不味い。せめて塩でもあれば…。牛や馬はこれに似た不味いものを、よく喰っているなァと、妙に感心する。モタモタしていたので消燈は9時。やはり寒くて眠れない。明日は下界か。嬉しい。

夜中に幻聴を聞く。女の人達が何か子守唄か数え唄のようなものを、短いフレーズで繰り返して歌っている声が聞こえる。多分、いつも一定でない強弱のある沢の流れがそういう風に聞こえるのだろうと、頭の中で理解していても、やはり怖い。それを打ち消そうと、大声で自分の知っている歌を歌い続けた。

やはり精神的に少しまいっているのだろうか。ガンバレ!助けは来る。

#### \* 6月1日(木) 晴れ 第6日目

起床5時。朝食はフキの真水炊き。今日も晴れ。幸運なのは、夜に降っても日中晴れることだ。ツェルトの内側は外気温との差でベっとり結露し、それが寝ている衣類の上に落ち、朝は

水浸しになってしまうが、日中お天気だと、それを乾かすのに好都合だ。

サァ！今日はヘリが来るぞ。期待に胸を膨らませて外で待っていると、8時30分、ヘリの音がした。来た！いいよ。ヘリは近くの稜線の上空を飛んでいる。私はあわててツェルトを畳み、ザックの中に押し込み、他の装備も入れ、ザックを作った。

先程のヘリはやがて姿を消し、その後違うヘリが来たが、それも去って行った。私はどういう心境か、ヘリを見ながら残り15個のカンパンを全部喰っていた。山の上空、殊に谷筋は風が強く、乱気流があって、ここに入って来られないのだろうか？特に遭難者を救助するとなると、15-20秒の空中でのホバリングが必要だろうから、なかなか難しいのかもしれない。

あァ、ガッカリだ。こうなれば地上からの救助しかないのだろうか。救助隊を編成して出発となると、ここへの到着は早くて昼過ぎか、遅ければ今夕か。何かウッチャリをくらったようで、沈みこんでしまう。昼過ぎ、ツェルトを張る。

山の良さは、自分の意志で入山し、自分の意志で好きな時好きな場所へ下山できること一だと思おうが、下山が叶わない山というのはむしろ憎たらしくらいのものだ。今回この山に入った事を後悔し始める。

4時頃よりフテ寝の昼寝。暖かいので割合よく眠れる。夕食はフキの真水炊き。

7時就寝。やはり夜中に幻聴を聞く。

### \*6月2日(金) 晴れ 第7日目

4時起床。朝食はフキ。昨日カンパンを全部食べてしまったことを後悔する。何か打開の道はないだろうか。少し時期を失した気もする。体力が急速に衰えたのが分かる。

ツェルトの側にボンヤリ座っていると、下の方から、

「オーイ！オーイ！テラサキサーン」

と呼ぶ声。私との間にあるクレバスの向こうに、

6-7名のパーティーが見えた。私は立ち上がり、夢中で手を振った。私は目が悪いので、目を凝らして良く見ると、3人のパーティーだった。

一人の人がクレバスを避け、左岸の崖を高巻きして小走りに登ってきた。

「寺崎さん？」

「ハイ」

「大丈夫？」

「ハイ、大丈夫です」

の会話の後、トランシーバーで連絡をとり始めた。

「こちら県警山岳救助隊。遭難者発見、遭難者発見」

「遭難者は生存しております。生存です」

「比較的元気です」

の連絡に、嬉しさがこみ上げて来た。隊員の日焼けした精悍な顔つきと、ガッチリした体つき、敏捷な動作はたのもしく、正に神々しくもあった。

「腹がへっていないか」

と聞かれ

「へっている」

と答えると、弁当を出してくれ

「沢山食べるともどすから、少しにしておきなさい。柔らかいものを食べなさい」

と言われ、里芋3つとオニギリ半個を食べた。あの味は一生忘れられない。

その後、高額品以外の装備はテント場に残し、アイゼンを着用後、隊員にザイルで確保してもらいながら雪渓を降り、クレバスの高巻きをする。滝の手前の狭いが、比較的平坦な雪渓上にヘリが着地し、私一人が乗り込む。

ヘリに乗り下を見ると、沢山の人々が林道に居り、ヘリを見上げていた。その時はじめて、皆さんの愛情と献身的努力を強く感じた。

ヘリから眺める初夏の陽に輝いたんばや家々を見た時、嬉しいような、切ないような気持ちで、目頭が熱くなるのであった。



\*あとがき

1. 捜索活動は、中田・河原両君のおかげで、入山翌日の日曜日早朝より、県警山岳救助隊により始められていた。
2. 私は、阿部木谷より、毛勝谷、ホーサマ谷より毛勝山本峰に登り、往路を帰る予定であった。実際には、出合より本来は東の毛勝谷に入るべきところを、南の大明神谷に入ってしまった、大明神山に登っていた。捜索隊に見られるまで、毛勝山に登ったと思いこんでいたのであった。1泊目のビバーク地点は、大明神山西南面、標高2,000m地点。2-6日目のビバーク地点は小沢谷の標高880m地点。
3. 今回捜索活動に御協力いただいた方々は県警山岳救助隊、魚津、上市、大沢野、黒部、入善の各警察署、自衛隊、魚津岳友会、高岡カラコルムクラブ、高岡市役所山岳会、高岡ハイキングクラブ、高岡市ヨット協会、並びに各個人的有志の方々です。
4. 捜索活動の初期は、主に、毛勝山-猫又山、阿部木谷、毛勝谷、小黒部などを集中的に捜索したため、小沢谷は最後になった。
5. 私が山行計画書を書いていかなかった事、出発時間が早過ぎた事、女房に云ってあった帰着時間の19時迄が長すぎた事から、快晴でもあって、猫又山まで往復をしたとの推定がなされ、捜索範囲が広がってしまった。
6. コースを間違えた原因と、対策
  - a 単独行であった事。
  - b 事前のルート調査、研究が不十分であった。
  - c 初めての山であるにもかかわらず、先頭で歩いてしまった。経験のある他のパーティーに追従していくべきであった。
  - d 休憩もせず、脇目もふらずボカスカ歩いてしまった事。
  - e 時々立ち止まり、周囲を観察するなり、2

万5千の地図とコンパスを読むことを怠った。

- f 各雪渓の分岐では、時間をかけて、正しいコースをじっくり考えるべきだった。
- g 早朝の堅雪の踏跡は残りにくいし、日中の太陽で溶けて消されてしまうので、自分の歩いた道に戻る可能性のある時は、要所要所に目印をつけておくこと。
- h 5-6月の雪面は、雪玉や岩のころがった跡がグリセードの跡に見えたり、シュカブラや獣の足跡が人の踏跡と錯覚し易いので注意。
- i 自分の現在地の確認は、谷や雪渓では眺望が効かないので難しい。稜線やピークでこそ、この確認が大切。
- j 谷や雪渓では、登りで迷いやすい。逆に稜線や尾根では、下りで迷いやすい。

欲しかった装備

万が一のそれぞれを考えて装備を用意すると荷は嵩張り重いものになるので、自分で担ぐことを考えると、程々ということになる。が、今回の遭難で、あれば良かったなと思うものをあげてみる。

1. トランシーバー又は携帯電話
2. 携帯ラジオ
3. 発煙筒
4. 高度計
5. 塩
6. 山岳遭難保険



そのほかのこと

今回救助されて下界に来た時、2-3人の方から

「何故<のろし>を上げなかったのか？」と聞かれた。雪渓上には倒木がゴマンとあって燃やす物は沢山あった。のろしを上げるということをおもいつかなかったのは、私にインディアンの血が流れていなかったせいか—それは冗談



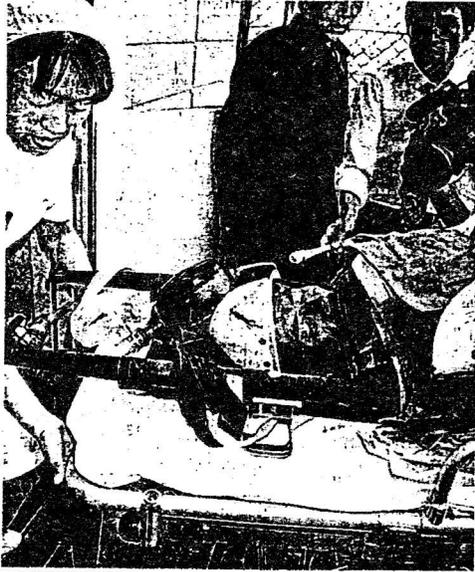
高岡の  
寺崎さん

# 6日ぶりに奇跡の生還

## テント張り張り助け待つ

### 毛勝山で 道に迷い、5メートル滑落

先月十七日、魚津市と富山県宇奈月町にまたがる毛勝山(標高四一四四)に登山したまま行方不明になっていた高岡市川上町、会社役員寺崎浩徳さん(58)は二日前午前九時十五分ごろ、片川上流の小沢谷(同八八〇)で滑落してテントを張り横たわっているところを捜索中の県警山岳捜索隊員に六日ぶりに発見された。寺崎さんは滑落後、「一丁」の捜索隊の救助を受け、尾骨骨折と脱水症状が出ている程度で元気だった。



ヘリポートから担架で運ばれる寺崎さん  
富山県の県立中央病院

寺崎さんが見つかったのは、下山途中に道に迷い、ヒールを滑り落ちた。発見されたのは毛勝山山頂から西五〇〇メートル、富岡が切れて滝の上にある。滑落した時、寺崎さんは簡易テントを張って、出たため身動きが出来ず、テントをばたきまくるだけだった。

寺崎さんは先月十七日午前三時半、高岡市の自宅をマイカーで出発、阿部木谷に車を置いて毛勝山へ向かった。

## 山菜食べ飢えしのぐ

### 「助からない」と恐怖心も

「フキやワドなどを食べ、あめ玉二十個程度を持参して飢えしのぎました。皆さんに迷惑を掛けてすみません。県立中央病院救命救急センターで診察を受けた寺崎さんはベッドに横たわり、日焼けした顔にやつれが見られたものの、元気な口調で生還までの経緯を話した。

寺崎さんは日帰りの予定で入山時におにぎり四個のほか、乾パン、コンビフ、



谷に車を置いて毛勝山へ向かった。日帰りで登山に出た。しかし、捜索隊は毛勝山の谷筋を捜索ポイントにしていたが、一日から捜索の輪を別の谷筋にも広げた矢先の発見となった。

夜になっても降らず二十八日午前一時ごろ魚津署に捜索隊が出され、連日約二十人の同県警山岳捜索隊や高岡市のボランティアグループ、魚津市友誼会や自衛隊ヘリコプターなども出動して二帯を捜索

を持っていたため、水炊きで救助を待ったが、「飛行機も通らず、助からないのでは不安になった」と発見されるまでの恐怖感が並大抵でなかった。心労も吐露した。

### 「無事で良かった」

病院に駆けつけた妻の掛けが、済まなそうなる様子で話していたという。妻は「無事で良かった」と涙ぐみながら話した。寺崎さんは滑落後、弟の寺崎敏夫さん(56)から発見の報告を熱線電話で受けた直後の妻と合流した。妻は「無事で良かった」と涙ぐみながら話した。

# 写真が語るふる里の自然

昨年、石川県によって選ばれた自然百景が、  
1冊の写真集になりました。  
1葉の写真が語る自然の美しさ、優しさ、厳しさ  
この1冊が、ふる里の自然の素晴らしさを語ります。

- 変形版 (好 242×30260mm)
- 定価 3200円 (税込み)

**4月発売**

※当社出版物のご予約、お買い求めは最寄りの書店  
または、当社までお申しつけください。



バックナンバーご希望の方は、はさみ込み  
のハガキに号数と冊数を明記してお申込み  
ください。

- |      |           |      |           |
|------|-----------|------|-----------|
| 第14号 | 特集—街を歩く   | 第15号 | 特集—奥山に親しむ |
| 第13号 | 特集—里山を楽しむ | 第16号 | 特集—海に潜る   |
| 第12号 | 特集—川と遊ぶ   | 第17号 | 特集—田園に学ぶ  |
| 第11号 | 特集—島を探る   | 第18号 | 特集—潟湖を巡る  |
| 第10号 | 特集—鯨の王国   | 第19号 | 特集—土と生きる  |
| 第9号  | 特集—藁草王国   | 第20号 | 特集—水のながれ  |
| 第8号  | 特集—白山王国   | 第21号 | 特集—風のように  |
| 第7号  | 特集—山菜の王国  | 第22号 | 特集—雪に舞う   |
| 第6号  | 特集—けもの王国  | 第23号 | 特集—彩      |
| 第5号  | 特集—温泉王国   | 第24号 | 特集—涼      |
| 第4号  | 特集—渚の王国   | 第25号 | 特集—音      |
| 第3号  | 特集—恐竜の王国  | 第26号 | 特集—光      |
| 第2号  | 特集—野鳥の王国  | 第27号 | 特集—医王山    |
| 創刊号  | 特集—キノコの王国 | 第28号 | 特集—九十九滝   |
|      |           | 第29号 | 特集—北部白山   |
|      |           | 第30号 | 特集—犀川     |

郵便はがき

9 2 1 - □ □

料金受取人払

金沢南局  
承認  
248

送付有効期間  
平成8年6月  
24日まで

(切手をはらず  
このままお出  
しください)

<受取人>  
金沢市増泉4-10-10  
橋本確文堂企画出版室内  
「自然人」編集室 行

ご住所	TEL
お名前	年齢 歳
ご職業	
お買い上げ書店名	市区 町村 書店

石川県のゆたかな自然を収録した写真集ができました。上馬さん、桐さん、舟田(例の大はしやぎの入選作)の写真も収められています。今回、著者割引に変わり郵送料無料という形で、金大ワングルOBにご提供できることになりました。

(思ったより売れていないというのが、実情のようでもあります。)

同封のはがき(切手不用)を利用してお申し込み下さい。職業欄に、金大ワングルOBと書いていただけますと、本と、上記サービスでの金額の振込用紙が送られてくることになっています。

上記のはがきの裏面下部 ご了承ください

■バックナンバーご希望の方は、号数と冊数を明記してください。

号 冊 号 冊 号 冊 号 冊  
号 冊 号 冊 号 冊 号 冊

■その他の当社出版物のご注文

を 冊申込みます。